

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	近詠十一首 : 短歌
Author(s)	平戸, 裕人
Citation	龍南, 2 3 7 : 3 2 - 3 3
Issue date	1937-06-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7381
Right	

短歌

近詠十一首

平 戸 裕 人

血を吐きし夢にめざめし曉に雁啼き渡る聲聞きにけり

醫者の薬も草津いでゆも利かざらむと看護婦あまた吾をからかへり

雨はれし朝のデッキをめぐりつつ昨夜の記憶のよみがへるはや

舷側に立ちし少女がひたむきに雲仙岳を眺めつつ居り

熊本行の發車待つ間のしばらくをベンチに凭りて葉書したたむ

寮をめぐる樹々の若葉に音たててゆふぐれどきの雨やまぬかも

翻譯書讀み初めたりし頃よりぞファツツヨを憎む心ありしか

癒えざらむ身をし敷きて朝鮮へ歸り行く君と又も會はめやも

加藤邸を急ぎ出で来て川岸の夕暗ゆふぐらがりに尿放にようちけり

火の山に馳はせし輝雄が歎かへば Die neue Erde を見つつ寂しき
實驗に疲れきぬれば背のびして齊藤大人うしの歌口ずさむ

柿の花

長
尾
壽
雄

柿の花のにほひゆたかなりこの夕べふるき洋燈らんぶをあかあかと灯す

舗道にも灯ともりぬ秋の雨人繁き巷に光りつゝ降る

ま晝間の墓場の隅に我ひとり聲たかだかとヴィロンを読む

向日葵は風にゆれつゝ晝深し此道しろじろと墓場につゞく

落陽おひびさす龍田の山は静かなりか細きかぜに木の葉散りつゝ